

## 『エグゼクティブは美術館に集う ——「脳力」を覚醒する美術鑑賞』

奥村高明 著



光村図書出版 2015年刊

評者 志賀野桂一\*

「ニューヨークのビジネスマンが、MOMA（ニューヨーク近代美術館）でギャラリートークを朝の8時半に聞いている。」この驚きの事象を起点に、美術鑑賞がもたらす多面的な効果を、臨床心理学者の前田基成と、帝京大教授の上野行一との対談をはさみながら、わかり易くひも解いてくれる啓蒙の書となっている。「脳力」を覚醒する美術鑑賞という副タイトルが示すように、これまで考えられてきた美術鑑賞の意義を、「教養を身に着け、情操を育む」といった常識を超える観点で深めているところが興味深い。

本の構成は、全体7章建てで書かれている。1章「なぜ美術は成績を底上げするのか？」3章「美術鑑賞は脳を活性化させる？」5章「賢くなれる美術鑑賞のコツ」の三つの章では、美術鑑賞の効用について論じられる。2章「脳は美術で育つ」では、前田との対談で絵を見る際の脳の働きを、4章「美術鑑賞で生まれる有能な私」7章「社会がわかる美術鑑賞」の二つの章では、著者とともに「美術による学び研究会」主宰者である上野との対談が組まれている。6章「美術品は誰が創るのか？」では、美術館の成り立ち歴史に触れ、美術鑑賞の方法や美術作品と鑑賞者との関係論に言及している。終章では「メタ認知能力」を鍛え、ビジネスや一般社会で生き抜く能力開発に収斂させている。絵や図式も多く読みやすい本である。

内容を詳しく見てみよう。

特にこの本を特色づけている前田との対談は興味深い。第2章で、絵を見

\* 東北文化学園大学総合政策学部教授

る際の《脳の働き》を詳述している。例えば、肖像画は、顔と体の認知で「腹側紡錘状回」、風景画の時は、場所を特定する「海馬傍回領域」、静物画の時は、「視覚野」が動く。さらに美・醜を判断するときには、「眼窩前頭前野」の「島皮質」という場所が働いているという。一般に左脳が論理的思考領域で、右脳が感情的判断領域といった単純なものではないらしい。

さらにゲッツェルス・ジャクソン現象<sup>1)</sup>が紹介され、「知能」と「創造性」と「学業成績」相関関係が述べられている。これによると「知能」がやや低くて「創造性」が高い子どもと、「知能」が高く「創造性」が低い子どもとの比較で、前者の方が「学業成績」が高いという結果が出ているという。平たく言えば「創造性を鍛えると学力が上がる」というわけだ。つまりアートに触れることは、脳の様々な領域を刺激し、発達させることができるという臨床学的な見解となっている。

4章&7章の上野の対談では、NYのビジネスマンがMOMA近代美術館で早朝ギャラリートークを聞く姿の謎を解いている。経済の最前線のビジネスマンが、発想力や創造力、直観力を養うために、再教育の場として、ビジネススクールではなくアートスクールに通い始めている現状が紹介される。アートに触れることが、仕事に行き詰る「思い込み」を解きほぐし、「創造的直観力」を高め、「問題解決の力」を養うに適しているからだという。これは経済・経営などとは全く無縁のアートがもたらす効用を端的に示す事例だ。

文部科学省が、これからの子供たちに必要なのは21世紀型能力だと発表があった。21世紀型能力とは、「基礎力」「思考力」「実践力」の3つであるが、これらを養うためにアクティブ・ラーニングや、プロジェクト・ベースド・ラーニング学習方法が喧伝されている。

いま、学校教育で教科を超えて育てなければならない能力のひとつとして「メタ認知能力」が論じられる。「メタ認知能力」とは、「高次(=メタ)の自分を知る能力」と言ってよいもので、子どもたちが彫刻を前にして同じポーズを真似したりするといった鑑賞行動を通して自然に身につく能力のことで、こうした能力を育てるには対話型の美術鑑賞方法が最適と述べられている。

子どもの学力も、美術鑑賞によって向上することが知られ、欧米では英国

---

1) Jacob W. Getzels and Philip W. Jackson, *Creativity and intelligence*, Wiley, 1961.

の「クリエイティブ・パートナーシップ」、米国の「Learning Through Art」といったプログラムが生まれ、子どもたちの思考力やコミュニケーション力、計画を実現させる力など様々な能力開発に効果をあげ、結果、子どもの成績向上に寄与している。こうしたプログラムを可能にしているのは、美術館とその優れたキュレーター達で、美術の持つ潜在力と、作品と向き合いギャラリートークを行う専門家であるキュレーター力とが揃って可能となる能力開発の事例と考えられるのである。

筆者が考えるに、作品鑑賞について、社会学者パーソンズの美術解釈理論が有名であるが、この理論は美術解釈の深度を測るには適した理論だが、実際の鑑賞を《する》または《させる》には適さない理論に思える。単純な好き嫌いではなく、美術史的な知見を交える高次元の鑑賞とは、明らかに異なる脳を使っていることが想定できるが、子どもの鑑賞行動をひも解いた時には、段階論ではなく、もっと複合的に、あるいは体感的に見ることがなされているように思われる。そうしたことから奥村の勧める美術鑑賞方法は、直接的で実用したい方法理論に思える。

平田オリザ著の『新しい広場をつくる』～市民芸術概論綱要<sup>2)</sup>という宮澤賢治を引用した副タイトルが付いた本があるが、これに書かれている「身体的文化資本」の蓄積に文化芸術は不可欠で、これからの教育の方向は、「学歴よりもセンス、資格よりも感性、知識よりもコミュニケーション能力」が求められる中で、美術館の果たす役割は大きいと思える。

今日世界各地で Louvre Abu Dhabi (ルーヴル・アブダビ)、ルイ ヴィトン芸術財団美術館など新しい美術館が次々に生まれ、日本も例外ではない。

かつて美術館は、ルーブルやエルミタージュのように王族や権力者の収蔵品であった。それを市民に公開することで始まった美術館が近代美術館の始まりである。中でも NY 近代美術館が、ホワイトキューブと呼ばれる展示の先鞭をつけ、世界的モデルとなった。また近年、フランク・ゲイリーによるビルバオ市のグッゲンハイムなど都市再生の起爆剤としてその価値が認められ、モダン・テートに代表される既存施設の転用による美術館も増えてきている。

2) 平田オリザ『新しい広場をつくる』岩波書店、2013。

国内に目を移すと、環境とまちづくりに資する直島の地中美術館、軽井沢の千住博美術館や、豊島美術館の内藤礼という作家一人に特化した美術館、坂茂のモバイル美術館など様々なタイプの美術館が生まれている。

都市における美術館とは何か、を考えるとときその奇抜な建築群に目を奪われ、美術館機能の核心に触れる議論がともすると忘れがちになる。

しかし、こうしたなかで本書は、美術館の価値創造には、建物・美術作品・鑑賞者の先に優秀なキュレーターが必要なこと、そしてキュレーターの重要性を再認識させてくれている。この本の主題が、美術館における美術鑑賞という王道を改めて掘り下げ、美術鑑賞に新たな方法論とともに光を当ててくれた意義は大きいものと筆者は考える。